

あるが内側は楕円形になり、地形の影響によるZ字型の屈曲を示している。このため、北側と南側で等圧線のこんだ部分ができ、この地域で風速が強まっている。不安定域もこの領域で発現しており、東西の方向には安定域が多くなっている。

同様にして低気圧が山陰沖および四国沖を通る場合にも低気圧の軸が南北に走るようになる。このために、低気圧が西日本付近を通過する場合は大体同じような不安定域の分布を示す傾向が現われ、降雨帯はその不安定域で強化されるため、雨量分布の形は低気圧の経路によって類似してくるものと思われる。

7. むすび

中程度に発達した低気圧が山陰沿岸から瀬戸内および四国沿岸にわたる間を通る場合は、大体次のような傾向がある。

(1) 地形性降雨は四国南東部や紀伊半島南東部で1時間に10~15mmくらいまで降り得るが、それ以上は不安定性降雨の傾向が強い。

(2) 力学的上昇による降雨は1時間に0.3~0.5mm程度で少ない。

(3) 低気圧の接近に伴い下層に不安定な気層が流入してくるが、不安定性降雨は低気圧の経路によって地形の影響を受けて強度に変化が起る。また低気圧に相対的

な位置によって不安定域が定常的に分布して、低気圧の進行とともに移動してきて、この両者が重なって強雨をもたらす。

(4) 20分間程度の強雨は消長がはげしいが、不安定域に発現し、その移動に伴って変化する。

(5) 低気圧が西日本付近を通るときは変形して風速分布に変化が起り、降雨帯の分布が低気圧の経路に伴って類似するようになる。

この調査は関西気象協会の研究助成金を受けて行ったものである。又降水資料のしゅう集には大阪管区気象台管内の各官署に協力して頂き、その整理には大阪管区気象台技術部調査課の方々に援助して頂いた。上記して謝意を表する次第である。

参考文献

- 1) 東京管区気象台調査課(1958): 地形性降水強度算出ユニットグラフの使用について, 東気調気象資料, No. 9B.
- 2) 齋藤直輔(1957): 雨量予報序論, 気象協会, 105pp.
- 3) 岸保勘三郎他(1956): 下層大気の気圧場並びに降雨量の数値予報について, 研究時報, 8, 473~494.
- 4) 今田 克(1960): 広島県の雨量予報について, 研究時報, 12, 724~743.

理 事 会 便 り

第3回(13期)全国理事会議事録

日 時: 昭和40年12月1日(水) 17.30~19.00

場 所: 気象庁 第3会議室

出席者: 島山, 北岡, 正野, 孫野, 山本, 山元, 岸保, 神山, 須田, 吉野, 小平, 今井, 大田, 安藤, 各理事および高橋, 藤田監事

議 決

1. 当学会が提出した気象学の長期計画のその後の経

過を明らかにするため、学術会議の秋季総会で可決された長期計画の内容を天気などに掲載するような処置をとること。

2. 来年度の当番支部は北海道支部とすることを承認する。

なお、地方における大会の開催地に、広島、京都、名古屋なども今後は考慮すること。

〔正 誤〕 天気1965年11月号 389頁所載の火山の活動と太陽活動の盛衰(荒川秀俊)

右欄下から11行目は次のように訂正(太字の部分を追加)

1883年は太陽黒点数が(極大になった年で、1902~03年は黒点数が極小になった直後にあたり、1912年は黒点数が)極小になる前年であった。